生活科において児童が意欲的に活動・体験するための手立ての工夫

――― 活動力に満ちた子どもの育成をめざして ―――

目　　次

Ⅰ　研究主題の設定理由…… 43

Ⅱ　研究仮説…… 43

Ⅲ　研究の全体構想図…… 45

Ⅳ　研究内容…… 47

1　研究の基本的な考え方…… 47

(1)　「自立への基礎」のとらえ方…… 47

(2)　なぜ具体的な活動や体験を重視するのか…… 47

2　研究の構想…… 48

(1)　ヒントシートを活用した授業展開…… 48

(2)　子どもの自発性を促す教師の働きかけ…… 50

(3)　カリキュラムの工夫…… 52

3　授業実践計画…… 53

(1)　単元名　第２学年「おもちゃ大会をしよう」…… 53

(2)　単元設定の理由…… 53

(3)　単元目標…… 54

(4)　単元展開の構想…… 55

(5)　指導計画…… 56

(6)　活動計画案…… 57

(7)　資料…… 63

Ⅴ　研修の成果と今後の課題…… 64

引用・参考文献…… 64

浦添市立浦城小学校教諭

下　地　福　子

生活科において児童が意欲的に活動・体験するための手立ての工夫

――活動力に満ちた子どもの育成をめざして――

浦添市立浦城小学校教諭　下　地　福　子

I　研究主題の設定理由

生活科の学習は，従来の教科の学習のように，教室の中での座学中心の学習とは異なり，教室の中ばかりでなく，教室を出て，あるいは地域に出かけて，さまざまな具体的な活動や体験を通して，体全体で学んでいくところに大きな特徴がある。それは，生活科が，子どもの日常の生活圏を学習の対象とし，また，低学年の児童には具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴があるからである。まさに，具体的な活動や体験が生活科の学習を生かす要であるといえる。しかし，こういった活動重視の授業であっても，子どもの内面から沸き起こる意欲によって展開するものでなければ，子どもにとって，真に生きて働く力にはなりえない。子どもが自ら「やってみよう」とする自発的な活動のできることが大切であると考える。

生活科の究極的な目標は「自立への基礎を養う」ことであり，学習や生活の基礎的な能力や態度の育成を目指すものである。いうなれば，子どもが学習や生活をしていくうえで，自信をもって意欲的に取り組んでいく術を身につけさせていくものであるととらえる。自分のことは自分なりに自分でやれるという自信が意欲的に物事にたずさわる時の内発的エネルギーとなり，新たな活動へとかりたてるからである。子ども自身による自発的な活動がすすめられるものであり，その子どもの自発的な活動の活性化を促す学習活動のできるものでなければならない。

子どもの自発的な活動を活性化させるためには，様々な手立てが必要となる。その手立てとしては，①ヒントシートを活用した授業展開，②子どもの自発性を促す教師の働きかけ，③それらを具体化したカリキュラムの工夫をすれば，学習活動へのきっかけをつかんで，自ら意欲的に活動できる子が育つと考える。

以上の観点から，第２学年の単元「おもちゃ大会をしよう」の学習活動を通して，自ら意欲的に活動する，活動力に満ちた子どもの育成を図ることができると考え，本研究主題を設定した。

II　研究仮説

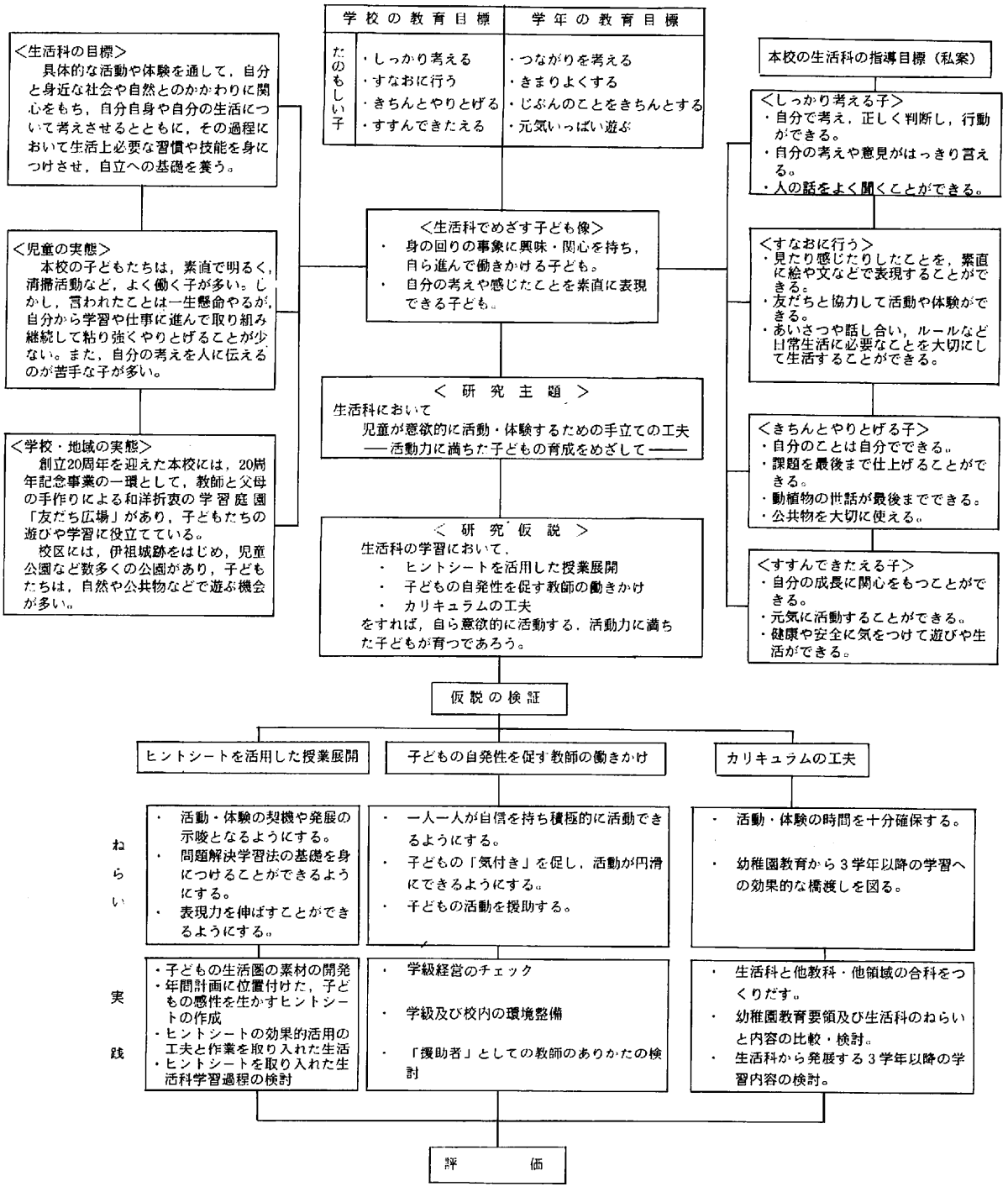
生活科の学習において

- ○ヒントシートを活用した授業展開
- ○子どもの自発性を促す教師の働きかけ
- ○カリキュラムの工夫

をすれば，自ら意欲的に活動する，活動力に満ちた子どもが育つであろう。

Ⅲ　研究の全体構想図

本校の教育目標を中軸にして，生活科の目標，児童の実態，学校及び地域の実態をふまえ，生活科の指導でめざす子ども像・研究主題・研究仮説を設定する。



Ⅳ 研究内容

1 研究の基本的な考え方

(1) 「自立への基礎」のとらえ方

生活科の目標は，「具体的な活動や体験を通して，自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ，自立への基礎を養う」ことである。つまり、生活科が求める究極的なねらいは，「自立への基礎を養う」ことである。ここで目指している「自立」とは，単なる生活習慣上の自立にとどまるものではなく，学習上の自立であり，精神的な自立である。このような様々な意味合いをもつ「自立」について，小学校低学年においては，その基礎としてどのような力が培われなければならないのであろうか。

このことについて，生活科の指導書では，「具体的検討が必要であるが，その幾つかを挙げてみたい」として，

○ 集団生活ができる。

（仲間意識や帰属意識をもたせ，共に遊び，共に学んで，よりよい生活ができること）

○ 自分のことは自分でできるようになる。

（日常生活に必要な習慣や技能を身に付ける）

○ 自分の考えや意見がはっきりと述べられる。

（自分の意思を人に伝えることができるとともに，人の話を聞くことができる）

○ 環境に積極的に働きかけることができる。

（身近な社会や自然への目を広げる）

という，４つの事項が例として延べられている。このように，協調性があり，自信と積極的な生活態度を兼ね備えたよりよい生活者としての子ども像が浮かび上がってくる。

この自立への基礎として，子どもの内面性からとらえた場合，子ども自身の「なにかをやろう」という自発的な活動意欲の育成が最も肝要であると考える。なぜならこの自発的な活動意欲がなければ，たとえ上記の４つの点についての行動ができたとしても表面的なものにすぎず，真にその子本人の自立へと向かう内なる思いが見えてこないからである。子どもの生活は本来，なにかやりたいことがあり，失敗を重ねながらも挑戦し続けるものである。そのようななかで充実感を味わう。それをバネに新たな課題をみつけていくといった主体的な問題解決の繰り返しであると考える。それこそ自ら自立していく子どもの姿ではなかろうか。

生活科が究極的にねらう「自立への基礎」は，あくまでも子どもが主体的に身につけていくものである。その，身につけていく過程において，いかに自発的な活動意欲を高めていくかが大切であると考える。

(2) なぜ具体的な活動や体験を重視するのか

生活科の目標には，生活科が求める四つの視点が示されており，その一つは「具体的な活動や体験を通すこと」としている。その趣旨は，「低学年児童には具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴がみられるので，直接体験を重視した学習活動を展開し，意欲的に学習や生活をさせるようにする。」ということである。

ここで大切なことは，子どもの思考の発達過程について理解しておくことである。このことについて，滝沢武久教授（電気通信大学）は，発達心理学者ピアジェの理論をふまえて，三つの特徴を挙げている。注1

その一つは，「思考は活動の内面化であり，活動から思考へ進む」ということである。活動がなければものを考えるということはありえず，特に子どもの場合はそうであり，中学生になってもその傾向はかなりあるということである。

その二つは，「子どもの発達はあやまちの自己修正にある」ということである。子どもの立場からみれば，正しい知識の量でもって発達をはかるべきではなく，子どもが本当に懸命になって試行錯誤をしながら正しい答えを見つけていく，それこそ本当の発達ではなかろうかということである。

その三つは，「"できる"から"わかる"へ（成功から理解へ）」ということである。できるかできないか，これは繰り返し上達するということによっていくらでも自分の能力を開発していくことができる。「できた！」という充実感は，自分の能力に自信を持たせる。これこそが学習の出発点であり，できるから次第にわかるへと進んでいく方が大事ではないかということである。

この三つのポイントからも，低学年においては，その発達の特徴から具体的な活動や体験がいかに大切であるかがわかる。低学年では，何よりも子どもの意欲・やる気を育てるような活動を重視した学習展開が求められている。

2 研究の構想

(1) ヒントシートを活用した授業展開

① なぜヒントシート活用か

生活科では具体的な活動や体験を重視している。しかもそれは，児童一人一人の主体的な取り組みによって行われることが求められる。いくら，児童が主体となる学習であるといっても，まずはじめに「子どもに育てたい力」は何かというねらいがあり，それに向けて，教師の意図的な活動計画がなければならない。そこで，その意図された活動に対して児童が自然に気付いたり，やる気を出すようにしむけるきっかけ作りが必要である。また，「自立への基礎を養う」という生活科の究極的なねらいからも，低学年の児童が，「こんなふうにやるんだな」と見通しをもって積極的に学習に取り組めるような手立てが必要となる。児童が学習を進める際のヒントとなる一つの資料としてヒントシートを活用すれば，児童の活動が活性化し，自立への基礎に培う活動力に満ちた子どもが育つであろうと考える。

② ヒントシートでねらえるもの

ア 活動のきっかけをつかませたり，活動意欲を盛り上げ，活動に発展性を持たせる。

子どもの感性に訴えるようヒントシート活用を工夫し，イメージをふくらませていく中で，「こんなことしてみたいなあ」とか，「調べてみたいな」といった活動意欲が高まり，自分なりの願いや問題を個性的に追究させていくことによって創造性が培われ，次から次へと活動に発展性がうまれていくと思える。

イ　問題解決的学習法の基礎を身につける

生活科は，身の回りの環境に進んで働きかける主体的な生活者の育成をねらっている。ヒントシートを通して自分なりに見出した問題や願いを，自分なりに，または，友達とのかかわりで追究していく中で，自然と自分から学びとろうとする能力や態度が育ち，問題解決学習法の基礎が身につくものと思われる。

ウ　表現力を伸ばす

生活科では，表現力が重視される。活動を進めながら，さらに活動をふりかえって，活動の様子や自分の考えなどを言葉，絵，動作，劇化などによって表現できるようにすること，といった表現活動それ自体が目標となる。表現力とはいろいろな能力の中でも総合的なもので，見る力，考える力，判断する力等も表現の中に集約されてくる。ヒントシート活用を通して，ものの見方や考え方を育てることにより，自ずと表現力も伸びていくものと考える。

エ　形成的評価に役立てる

小学校児童指導要録の生活科における評価の観点は，関心・意欲・態度・思考・表現・気付きとなっている。それらの評価の観点は，どのように見ていけばよいのであろうか。第２学年の「おもちゃ大会」を例にとってみると，

(ア)　関心・意欲・態度については

○　自分が作るおもちゃの材料を集めてきた。

○　おもちゃ大会の準備を一生懸命している。

(イ)　思考・表現については

○　熱中しておもちゃ作りをしたり工夫したりしている。

○　遊びに夢中になっている。

○　できた喜びや思いをカードに書いている。

(ウ)　気付きについては

○　自分の身の回りにあるものでたのしいおもちゃができることがわかる。

○　友だちのおもちゃの工夫や良さがわかる。

といった評価の見方が考えられる。また，生活科では学習の過程で生活上必要な習慣や技能を身に付けさせることや，学習の生活化が求められる。それらの評価も次のように考えられる。

(エ)　習慣・技能については

○　安全に気をつけて道具を使うことができる。

○　友だちと協力しておもちゃ大会を運営したり，仲良く遊んだりすることができる。

(オ)　実践的態度については

○　身の回りの素材を使って必要なものを作り，生活にいかしている。

このように見てくると，生活科の評価はテストでできるものでない。個に応じた形成的評価によって成り立つものと思われる。単元全体を通したヒントシート活用は子ども一

人一人の活動が見えるので形成的評価に役立つものと思われる。

オ　学校独自の学習展開が見えやすい

生活科は，「ふるさと学習」と言われるようにそのカリキュラムは各学校毎に異なり，学習活動も多種多様である。そこで，誰でもすぐ使える年間計画に即した学校独自のヒントシートがあれば，新しく赴任されてきた方やはじめて生活科の授業をされる方も，その学校における生活科学習の様子がよくわかり，学習の見通しが立ち，授業展開に役立てることができるのではないかと考える。

③　ヒントシート作成上の留意点

ア　児童の感性に訴え，イメージを広げ，創造性を引き出す内容とする。

イ　できるだけ児童の活動・体験を引き出す内容とする。

ウ　年間計画に即した内容とする。

エ　地域や学校及び児童の実態に即した内容とする。

オ　教師の意図が全面に出るのではなく，児童が主体的に進められる内容とする。

④　ヒントシート利用の留意点

ア　ヒントシートといえば形式が一定なのでその活用法も画一的になりがちだが，あくまでも活動の契機作りや活動の発展を手助けする一つの資料とする。子どもが自分独自の資料として個性的に活用していくようにさせ，単なるペーパー上の作業に終わることがないようにする。ヒントシートを通して，気付いたり，「やってみたいなあ」と思ったことを，すぐ取り上げ，活動に移るようにさせる。

イ　いつ，どのようなヒントシートを，どのように与えればよいのか，単元のねらいや児童の実態に合わせながら考慮する。

⑤　「おもちゃ大会をしよう」の単元におけるヒントシートの例

ア　どんなおもちゃがあるか調べるヒントシート（おもちゃに関心を持たせる。）

イ　どんなおもちゃを作りたいか考えるヒントシート（作りたいおもちゃのイメージ化を図る。）

ウ　自分のおもちゃを紹介するヒントシート（自分の作ったおもちゃに自信を持たせる）

エ　おもちゃ大会でどんなことをしたいか考えるヒントシート（おもちゃ大会への関心と意欲を持たせる。）

オ　楽しかったことや工夫したことなどを表現するヒントシート（活動を振り返らせ，発表する意欲を持たせる。）

(2)　子どもの自発性を促す教師の働き

①　学級経営について

生活科は，そのねらいや内容からみても他教科とは異なり，子どもの生活全体にわたっているといっても過言ではない。特に生活科においては，子どもが生き生きと学習に取り組めるかどうかは，学級がどのように経営されているかにかかってくると考える。どの子も素直に自分らしさを発揮できているだろうか，自由な中にもけじめはついているだろうかなど，常に学級経営のありかたをチェックすることが大切である。

そこで，その学級経営のチェックポイントを考えてみた。

ア　教師が児童一人一人の個性をしっかり理解しているか。

イ　児童同士の個性の認め合いはあるか。

ウ　児童主体の活動に移る前に，具体的なやり方がわかっているか。

エ　失敗や不便も乗り越えることができるか。

オ　基本話型に慣れ表現できるか。

この他にもいろいろあると考えられる。実践を重ねながら検討していきたい。

② 環境整備について

生活科の学習においては，「よし，やってみよう」と自発的に活動ができる環境作りが大切である。教室から外に出ての学習が多くなるので，学校内外において，生活科の学習に生かせる素材がどこにあるのか，それはどのように活用できるのか，いつごろ活用できるのか具体的に把握しておく必要がある。また，従来からある特別教室や砂場など学校内にある施設・設備も生活科の学習との関連を把握し，活用していきたい。

生活科の学習を支える環境作りとして，次のことが考えられる。

○　素材の選択を行い，資料を整えるための環境整備

○　教室の環境整備

○　植物を育てたり動物を飼ったりするための環境整備

○　教材教具を準備，展示，保管するための環境整備

○　活動する場所の環境整備

③ 子どもの活動へのかかわり方

生活科は活動や体験を重視しているが，決してそれだけで終わるものではなく，究極のねらいは，自立への基礎を養うことである。活動・体験重視の授業であっても，教師の子どもの活動へのかかわり方いかんによって，真に子どもにとって意味のある自立への基礎となる力が培われたかどうかが決まってくるものである。教師は，子ども一人一人の意思や活動を大切にしながら，子どもがこのように育ったら自立へ向かうだろうという具体的なねがいをもって，子どもの活動へかかわっていくことが大切であると考える。

私は，その具体的なねがいを，次のようにとらえている。

○　「できるかな，でもやってみたい」というように，自らの意思で活動に取り組める。

○　失敗してもくじけずに，自分の納得のいくまでねばり強く工夫して活動する。

○　活動中または活動をふりかえって，活動したこと，自分が感じたことなどを絵や文等に表現することができる。

このような子どもの姿にせまるためには，子どもの活動の良き理解者として，または援助者として，活動の様々な場面での言葉かけや子ども同士のかかわらせ方などの手立ての工夫が求められる。

例えば，「おもちゃ大会をしよう」の単元では，次のような教師の働きかけが考えられる。

○　おもちゃに関心が持てない子への働きかけ

○　作りたいおもちゃのイメージがつかめない子への働きかけ
○　作りたいおもちゃはあるが技能が伴わない子への働きかけ
○　製作がうまくいかず悩んでいる子への働きかけ
○　意見が衝突している子どもたちへの働きかけ

(3)　カリキュラムの工夫

生活科新設の趣旨として，幼稚園教育との関連があげられる。生活科において，具体的な活動や体験といった直接体験が重視される理由も，小学校低学年の児童の心身の発達は，幼稚園の年長児から小学校中・高学年の児童への過渡期的な段階であり，具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴から考慮されたものである。だが，生活科における幼稚園教育との関連は，具体的な活動や体験を重視するということだけではない。幼稚園教育要領をみると，幼稚園の教育課程は，心身の健康に関する領域「健康」，人とのかかわりに関する領域「人間関係」，身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」，言葉の獲得に関する領域「言葉」，及び感性と表現に関する領域「表現」の５つの領域から成り立っており，そのねらいや内容は，「生活に必要な習慣や態度を身につける」とか「人や身近な環境とのかかわり」又は「表現意欲」といった，生活科の学習内容につながるものが多い。つまり，生活科は，その学習内容からみても，幼稚園教育の継続・発展を担う重要な教科であることがわかる。

しかし，カリキュラムにおける両者の違いをみてみると，前者は，「幼稚園における生活の全体を通じ幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること」に対し，後者は，小学校教育課程の中の１教科であるということである。生活科を従来の教科と同じようにとらえるのではなく，教師の発想の転換が必要である。又，子どもの「自立への基礎を養う」という生活科の目標は，わずか週３時間の生活科の授業だけで十分達成できるものではない。低学年全体の教育課程でとらえた展開が大切であると考える。子どもの「思い」を大切にし，具体的な活動や体験が主体となる教科でもあるので，児童が思いっきり活動・体験できる時間を確保することが必要である。また，他教科・他領域との効果的な授業展開を図るためにも，生活科と他教科・他領域の合科をうまくつくりだしたい。「おもちゃ大会をしよう」の単元については，国語・図工・学級活動等との合科が考えられる。

それから，生活科という教科は小学校の１・２学年にのみあることを十分留意する必要がある。生活科は，他教科のような教科の系統性はない。ところが，身近な社会や自然を取り扱うその学習内容は，３学年以降から学習する社会科・理科の学習へつながるものである。生活科の授業を展開するにあたっては，３学年以降における社会科及び理科の学習内容やねらいを考慮する必要があると思われる。例えば，２学年における「校区探検」などの内容の学習は，３学年の社会科の「自分たちの市(区・町・村)」の学習につながるものであるし，身近な動植物を育てたりする内容の学習は，理科のＡ領域の学習につながるものである。このように，３学年以降の学習への基礎・基本となる生活科であるが，大切なことは，多様な原体験が必要であることだと考える。幼稚園においては，「しゃぼんだま遊び」や「色水遊

び」など，理科的な遊びがよく取り上げられ，子ども達も夢中になって遊んでいる。そこにはもちろん，教科の系統性など意識されてはいないが，それらの体験は確かに子どもの感性を豊かにし，自然認識の芽を培っている。しかし，生活科の内容を見てみると，理科のＢ領域につながる内容が１・２学年いずれにもない。３学年以降の学習への橋渡しとしても，具体的な活動をして思考するという発達段階にあり，感性の豊かな低学年において，理科のＢ領域につながる内容も含めた多様な原体験を幼稚園に引き続いてさせておく必要があるのではないかと考える。決して知識・理解を目的とするのではなく，遊びを内包する体験的活動の中で，数多くの「気付き」の機会を用意してやることが生活科においては重要であると考える。

3　授業実践計画

(1)　単元名

第２学年　　「おもちゃ大会をしよう」

(2)　単元設定の理由

子どもたちは，本来，創造的で，実に様々なアイディアを出すものである。しかし，子どもたちの生活を見てみると，ファミコン等一人でも十分楽しめるおもちゃが普及し，集団遊びをする子があまり見られない。様々なおもちゃや便利な遊び道具があるが，受け身的なものが多い。このような，できあいのおもちゃの中で育ってきた子どもたちは，自分でものを作って遊ぶという経験が少ない。子どもたちに，自分でおもちゃを作って遊ぶ楽しさを味わわせ遊びや生活を，積極的に変化のあるものにする経験をさせるようにする。

本単元は，指導要領「(4)身の回りにある自然の材料などを用いて遊びや生活に使うものを作り，みんなで遊びなどを工夫することができるようにする。」の内容を受けて，子ども自身の手で工夫し，追究し，完成の喜びの味わえる，一人一人の子どもたちに心から満足感を与えるであろう「おもちゃ」を取り上げる。おもちゃは，種類を限定せず，自分が作って遊びたいおもちゃをイメージし，試行錯誤しながらよりよいものを作り上げていく過程で，追究する力をつけていきたいと思う。また，材料は廃材等を利用し，身近な環境に目を向けさせ，物を大事にする心や創造性を培うようにする。

単元を展開していくに当っては，製作や遊びの過程で，子ども同士の教え合いを大切にする。友だちのおもちゃで遊んだりグループでともに作っていく中で，新たな発想が生まれ，工夫したり改良していくようになると思われる。また，ともに作ったりともに遊んだりする際には意見の衝突やけんがが起こることも予想される。それらも自分たちで解決させていき，協調性や思いやりの心を育てていくようにする。

おもちゃが出来上がると，子どもたちは自然に競争を始めたり，いろんな遊びを考えて遊ぶようになる。このような自然発生的遊びを取り上げ，学級全体の行事へと「おもちゃ大会」を提案し，新たな目標をもたせる。そして，会の企画・運営はできるだけ子どもたちに任せ，おもちゃ大会に向けて，グループや学級全体の話し合いの場を数多く設け，「自分たちでつくっていくんだ」という意欲を喚起させるとともに，みんなで協力することの大切さに気付かせるようにする。

さらに，単元全体を通して，子どもが自ら意欲的に活動のできるように，イメージをかきたてる動機付けを工夫していく。それには，教室の環境作りや教師の手作りおもちゃの提示，ヒントシートの活用等が考えられる。

おもちゃ作りのアイディアを通して，自分の生活をより楽しく充実したものへと工夫する子どもが育つものを考え，本単元を設定した。

(3) 単元目標

① 身の回りにある材料を用いて，工夫しておもちゃを作り，自分でおもちゃを作っていく楽しさや完成したときの喜びを味わうことができる。

② 友達と協力して，おもちゃ大会を計画・運営することができる。

③ おもちゃ作りや友達との遊びで，自分が工夫したことやできるようになったこと，気づいたことなどを，絵や文，言葉などで表現することができる。

(4) 単元展開の構想

＜小単元名＞	＜学習の流れ＞	＜期待する子ども像＞
1　おもちゃを作ろう－1（5時間） ＜活動名＞ (1)「どんなおもちゃを作るか考えよう」（2時間） (2)「楽しくあそべるおもちゃを作ろう」（2時間） (3)「おもちゃをしょうかいしょう」（1時間）	試行錯誤し作る	・どんなおもちゃがあるか，意欲的に調べようとする子 ・手作りおもちゃで十分遊ぶ子 ・作りたいおもちゃを考え，設計図をかいたり，必要な材料を集める子 ・自分のイメージしたおもちゃ作りに向けて，作り上げる喜びを感じながら，意欲的に作業を進める子 ・作ったおもちゃを紹介できる子
2　おもちゃを作ろう－2（2時間） (1)「友だちとおもちゃを作ろう」（1時間） (2)「おもちゃじまん会をしよう」（1時間）	比較・工夫・改良	・もっと楽しく遊べるように，友だちと相談しながら工夫しておもちゃ作りをする子 ・おもちゃじまん会を開き，自分達で作ったおもちゃを紹介できる子 ・友だちと遊び方を工夫しながら楽しく遊ぶ子
3　おもちゃ大会をしよう（6時間） (1)「おもちゃ大会であそぶおもちゃを作ろう」（2時間） (2)「おもちゃ大会のじゅんびをしよう」（2時間） (3)「おもちゃ大会をしよう」（2時間）		・おもちゃ大会に関心をもち，意欲的に計画しようとする子 ・友だちと相談しておもちゃを工夫したり改良したりして，よりよいものを作ろうとする子 ・友だちと遊び方を工夫して，楽しく遊ぶ子 ・みんなと力を合わせておもちゃ大会の準備をしたり，片付けができる子
4　楽しかったことを発表しよう（2時間） (1)「楽しかったことを絵や作文にかいて発表しよう」（2時間）	活動を振り返る	・楽しかったことや工夫したことなどを意欲的に絵や作文に表し，発表したり，友だちの発表をきちんと聞く子

(5) 指導計画（17時間）

小単元名とねらい	時間	学 習 活 動	指導の手立て
おもちゃを作ろう －1 ・ 身の回りの材料を使っておもちゃを作っていく楽しさを味わいながら，楽しく遊べるおもちゃを作る。	5	・ おもちゃで遊んだり，どういうおもちゃがあるか調べたりして自分で作りたいおもちゃのイメージをもつ。 ・ 身の回りにある自然物や廃材などを使って，楽しく遊べるおもちゃを作る。 ・ 作ったおもちゃで友だちと楽しく遊ぶ。	作りたいおもちゃのイメージ化を図る。
おもちゃを作ろう －2 ・ もっと楽しく遊べるように友だちと一緒におもちゃを作ったり，遊び方を工夫して楽しく遊ぶ。	4	・ もっと楽しく遊べるように友だちと一緒におもちゃを作る。 ・ おもちゃ大会を開き，自分達で作ったおもちゃを紹介する。 ・ 遊び方を工夫して，作ったおもちゃで楽しく遊ぶ。	友だちと共に作りあげる楽しさを喚起させる。
おもちゃ大会をしよう ・ おもちゃ大会への意欲をもち，目的に合ったおもちゃを改良しながら作り，友だちと遊び方を工夫して楽しく遊ぶ。	6	・ おもちゃ大会へ向けて，作ったおもちゃを改良したり，新しく作ったりする。 ・ おもちゃ大会を楽しくするためにはどうすれば良いか話し合い準備をする。 ・ おもちゃ大会を開き，友だちと遊び方を工夫しながら楽しく遊ぶ。	大会の設定と意欲の高揚
思い出を発表しよう ・ 楽しかったことや工夫したことなどを絵や作文に表し発表する。	2	・ 活動を降り返り，楽しかったことや工夫したことなどを絵や作文に表し，発表する。	活動の称賛と生活化を図る

(6) 活動計画案

活動名	どんなおもちゃを作るかかんがえよう 1・2／17（2時間）	ねらい	どういうおもちゃがあるか調べたり，手作りおもちゃで遊んだりして，自分が作るおもちゃのイメージをもち，おもちゃ作りの計画を立てることができる。

活動内容	時間(分)	ねがう子ども像	教師の手立て
1 調べてきたおもちゃを紹介する。 （ヒントシート1）		○ どんなおもちゃがあるか関心をもち，調べてきたことを発表したり，友だちの紹介したおもちゃに関心をもつ子 あ，それしってる へぇ，そんなものもあるんだ	・ 事前にヒントシートを渡して，おもちゃに関心をもたせておく。できたら，作り方なども調べてくるようにさせる。
2 手作りおもちゃで遊ぶ。	15	○ 手作りおもちゃで十分遊ぶ子 ○ 手作りおもちゃに関心をもつ子 ○ どんなしくみなのか興味をもつ子 こんなもので作れるんだ わかった，こういうしくみか	・ 教師は，簡単なしくみで動くおもちゃを準備しておく。 風で動くおもちゃ ごむで動くおもちゃ 空気で動くおもちゃ ばねで動くおもちゃ
3 おもちゃを作る計画を立てる。 （ヒントシート2）	60 90	○ 自分の作りたいおもちゃを考えそのイメージしたものを設計図にかいたり，準備するものを考えたりして，意欲的におもちゃ作りの計画を立てる子 こんなおもちゃを作ろう	・ うまくイメージできない子は，もう一度手作りおもちゃで遊ばせる。

評価	・ 手作りおもちゃで十分遊び，手作りおもちゃに関心をもつことができたか。 ・ 作りたいおもちゃを考え，おもちゃ作りの計画を立てることができたか。

活動名	友だちとおもちゃを作ろう 6・7／17（2時間）	ねらい	もっと楽しく遊べるように，友だちと一緒に相談しながらおもちゃを作ることができる。

活動内容	時間(分)	ねがう子ども像	教師の手立て
1　グループに分かれておもちゃを作る計画を立て，力を合わせて楽しく遊べるおもちゃを作る。 （ヒントシート2）		○　友だちと相談しながら，一緒に作るおもちゃ作りの計画を立てることができる子 こんなおもちゃを作ろう こういうのはどうだろう	・　事前に声をかけておき，スムーズにグループ作りができるようにする。
		○　協力し合って，楽しく遊べるおもちゃを作る子 ここはこうしよう いや，このほうがいいよ	・　特定の子だけが主体になるのではなく，どの子も参加できるようにする。
	90	○　作り上げた喜びを感じる子	・　工夫している点などをほめ，自信をもたせる。

評価	・　友だちと協力しておもちゃを作ることができたか。

活動名	おもちゃじまん会をしよう 8・9／17（2時間）	ねらい	友だちと一緒に作ったおもちゃを紹介することができ，みんなと遊び方を工夫して遊ぶことができる。

活動内容	時間(分)	ねがう子ども像	教師の手立て
1　おもちゃじまん会を開き，友だちと一緒に作ったおもちゃをみんなに紹介することができる。		○　工夫したところや，遊び方などをみんなに紹介する子 わたしたちは，ここをくふうしました。 ここに入ると10点になります。	・　協力して作ったことを称賛し，自信をもたせる。
2　遊び方を工夫して，楽しく遊ぶ子。	30	○　他のグループとも交流しながら仲良く遊ぶ子 あのグループのおもちゃもおもしろそうだね。 もっとやり方をかえようよ きまりをつくろう	・　遊び方を工夫すると楽しく遊べることを示唆する。 ・　遊びながら気づくことがあれば，工夫や改良をしていくようにさせる。
	90	○　おもちゃ大会へ関心をもつ子	・　こんどは，クラス全員が楽しめるおもちゃ大会をしようと呼び掛ける。

評価	・　友だちと一緒に作ったおもちゃを紹介することができたか。 ・　遊び方を工夫して遊ぶことができたか。

活動名	おもちゃ大会で作るおもちゃを作ろう 10・11／17（2時間）	ねらい	おもちゃ大会に関心をもち，楽しい会にするために友だちと相談しながら，作ったおもちゃを改良したり，新しく作ったりすることができる。

活動内容	時間(分)	ねがう子ども像	教師の手立て
1　おもちゃ大会で遊ぶおもちゃを考える。		○　おもちゃ大会に関心をもち，おもちゃをもっといいものにしようと意欲をもつ子 あのおもちゃもつかおう もっと工夫したら楽しそうだよ	・　みんなが楽しく参加できるにはどんなおもちゃがいいか考えさせる。
2　各グループに分かれて，おもちゃ大会で遊ぶおもちゃを作る。	15	○　友だちと相談しながら，作ったおもちゃを改良したり，新しく作ったりする子 こんなものもひつようではないかな ここをかいりょうしよう	・　グループは，状況に応じて，編成し直してもよいことにする。 ・　だれもが楽しめるようなおもちゃを意識させる。
		○　おもちゃ大会に期待をもつ子 楽しくなりそうだね	・　自分たちでつくっていくんだという意欲をもたせる。
	90		

評価	・　おもちゃ大会に関心をもったか。 ・　友だちと相談しながら，おもちゃを改良したり，新しく作ることができたか。

活動名	おもちゃ大会の準備をしよう 12・13／17（2時間）	ねらい	おもちゃ大会に関心をもち，楽しい会にするために，必要なものを友だちと相談しながら作ることができる。

活動内容	時間(分)	ねがう子ども像	教師の手立て
1　おもちゃ大会の計画を立てる。 ・　プログラム ・　役割 ・　約束 （ヒントシート4）		○　おもちゃ大会を楽しくするために，プログラムや役割，約束など考える子 司会もひつようだね やくそくをきめておこう ぼく，しゅうりがかりになりたいなあ	・　おもちゃ大会をみんなの力で成功させようと意欲をもたせる。 ・　基本的なこと以外は子どもたちに任せる。
2　おもちゃ大会に必要なものを作る。	45	○　おもちゃ大会を楽しくするために必要なものを考え，友だちと仲良く作る子 1位の人には賞をあげよう 記念品はどうかな ゴールはどう作ろうか	・　子ども同士の交流を図る。 ・　うまく思いつかない時は，お祭りなどを想起させ，ヒントにする。
	90		

評価	・　おもちゃ大会を楽しい会にしようと意欲をもったか。 ・　友だちと相談しながら，必要なものを作ることができたか。

活動名	おもちゃ大会をしよう 14・15／17（2時間）	ねらい	自分の役割を果たし，友だちと遊び方を工夫しながら楽しく遊ぶことができる。

活動内容	時間(分)	ねがう子ども像	教師の手立て
1　おもちゃ大会の準備をする。		○　みんなと力を合わせて，おもちゃ大会の準備をする子 スタートはこっちだよ	・　事前に役割分担をしておく。
2　開会式を行う。 ・　遊び場の紹介 ・　約束	10	○　大会を成功させようと意欲をもつ子 たのしみだね いっしょにやろうね	・　進行は子どもたちに任せ，教師は援助する。
3　遊び方を工夫しながら，友だちとおもちゃで遊ぶ。	15	○　約束を守り，遊び方を工夫しながら，友だちと仲良く遊ぶ子 競争しよう やった，一番だ ようし改良しよう	・　教師も一緒に遊びに加わり，遊び方の援助をしていく。 ・　遊びながら，さらに新しい遊びを思いついたりおもちゃをさらに工夫，改良できるように，材料や道具などの準備をしておく。
4　閉会式を行う。	75	○　楽しかったことなどを，みんなの前で発表できる子	・　活動を称賛し，自信をもたせる。
5　後片付けをする。	85 90	○　自分から進んで後片付けをする子	・　事前に役割分担をしておく。

評価	・　友だちと遊び方を工夫して，おもちゃで楽しく遊ぶことができたか。 ・　自分から進んで準備や後片付けができたか。

(7) 資　料

「おもちゃ大会をしよう」のヒントシート

（ヒントシート１）

どんなおもちゃがあるかな？
「だれにたずねようか」

なまえ（　　）

この部分の言葉だけを変えるようにした。

具体的に何かをしなさいと指示するのではなく，できるだけ，子どもの主体的な活動を誘発するために，まず，子どもにやり方を考えさせるようにした。

（ヒントシート２）……どんなおもちゃを作ろうかな？
「どんなじゅんびがひつようだろう」

（ヒントシート３）……おもちゃのじまんをしよう！
「くふうしたところはどこかな」

（ヒントシート４）……おもちゃ大会をしよう！
「どんなじゅんびがひつようだろう」

（ヒントシート５）……楽しかったことをみんなに知らせよう！
「どんなふうに知らせようか」

V　研修の成果と今後の課題

1　成　果

(1)　生活科の新設の背景と教科の特性を理解することができた。

(2)　生活科で育てる子ども像をとらえることができた。

(3)　児童が意欲的に活動するための手立ての一つとしてヒントシートの活用の仕方がわかった。

(4)　第２学年「おもちゃ大会をしよう」の授業実践計画案を作成した。

2　今後の課題

(1)　「おもちゃ大会をしよう」の実践と検証。

(2)　子どもの感性を生かし，地域や学校の特性に応じたより適切なヒントシートの工夫。

(3)　学級経営の見直しと環境整備。

おわりに

研修にあたり，指導助言をいただきました宮城小学校の与儀啓子先生をはじめ，温かく励まして下さいました研究所の方々や浦城小学校の先生方，ともに協力して学びあった研究員の皆様に心から感謝いたします。

<引　用>

注１

藤沢市教育文化センター	教育課程開発資料　生活科	P57～62	1991年

参考文献

宮本光雄	生活科の理論と実践 授業づくりから評価活動まで	東洋館出版社	1990年
櫛田　磐　他４名	「生活科」を創る	学芸図書	1989年
筑波大学附属小学校 総合活動研究部	学ぶ力を育てる総合活動	図書文化	1985年
中山洋司	生活科子どもの活動へのかかわり	国土社	1991年
有田和正	有田式生活科ワーク（１－２年用）	明治図書	1991年
有田和正著作集	「追究の鬼を育てる」19 生活科につながる総合活動	明治図書	1989年
日台利夫編	生活科研究授業のモデル指導案と展開	明治図書	1991年
教科通信	第27巻　第21号　生活科特集　No.３	教育出版	1991年